

問題 次の文章は「ジャポニカ学習帳」の表紙を飾る虫や花の写真を40年にわたって撮影してきた自然写真家山口進さんへの聞き書きです。最近では「虫を気持ちが悪い」という子どももいるようです。あなたは子どもと自然の関係についてどう考えますか。また、将来子どもに関わる仕事についたとき（教諭・保育士・その他）、子どもにどのように自然と関わらせていきたいですか。あなたの考えを800字以内で自由に述べて下さい。

*山口進（やまぐち・すすむ）70歳 1948年、三重県生まれ。長崎県で育つ。大学卒業後、電機メーカーのシステムエンジニアを経て、76年に写真家として独立。「ジャポニカ学習帳」の写真を78年から一人で撮り続ける。日本蝶類学会江崎賞受賞。NHK「ダーウィンが来た!」「ワイルドライフ」の企画・撮影も手がける。山梨県在住。

■「虫や花、子どもたちが正しく理解できるように」

一瞬のチャンスを逃さない。カメラマンが持たれがちなの、そんなイメージとはかなり違う。

チョウが飛来し、花に止まっても、静かに見つめるだけでカメラを構えない。やがてチョウが飛び去る。「いいんですよ。『自然は繰り返す』と信じていますから」

写真家である以上に観察家であり研究者だ。まず、しっかり観察して生態を理解する。そしてチョウが再び来るのを辛抱（しんぼう）強く待つ。

幼いころからセミやトンボなど昆虫を採るのが大好き。海洋学者の父の書棚にあふれる自然関係の本にも親しんだ。大学で統計学を学び、企業の技術者になったが、しっくりこなかった。27歳の時、昆虫展でプロカメラマンの作品に驚いた。「本当にやりたかった仕事はこれだ」。辞表を書き、翌年、赤道近くのニューギニア島行きの貨物船に乗った。カメラを持つのも初めて。撮影の入門書を読みつつ、虫を追いかけた。

帰国して持ち込んだ写真は雑誌「アサヒグラフ」に載（の）った。ほどなく、ジャポニカ学習帳への掲載の話が来た。「ライバルに負けないノートを作りたい」と考えていた、ショウワノート（本社・富山県）の担当者の目に留まった。

ノートは国語や算数のほか自由帳や日記などもあり全70種類あった。裏表紙も合わせて各3点ずつ写真が必要だ。計210枚の撮影に、数カ月かけて世界中のジャングルや高山を歩き回った。以来、現在まですべての写真を山口さんが撮影している。

奇をてらう構図はない。「虫や花の姿を子どもたちが正しく理解できるように」。そんな思いから、ありのままの自然の姿や色を伝えることを、心がけてきた。

苦い思い出もある。1990年代、日本中でクワガタブームが起きた。「きっかけを作ったのは私でしょう」と山口さん。生態がよく分かっていなかったオオクワガタなど国内のすべての種類を調べて、80年代後半に生態図鑑を出版。皮肉にもこれが格好の採集ガイドとなり、乱獲も起きた。

ジャポニカ学習帳も変わった。2012年に虫の写真は中止になり、花だけになった。「気持ち悪い」「子どもが怖がる」といった声が寄せられたためだ。とくに都会暮らしだと虫にも出会えないからなのか――。寂しかった。

作品を通じて伝えたいのは生物同士の結びつきだ。虫と草花、動物と樹木が互いに助け合い、共生する姿を数多く観察してきた。

だから、「写真を1枚だけ」という注文には応じない。切り売りでは自然の理解にならない。生き物の暮らしぶりが分かる本を多く出しているのも同じ思いからだ。

すまいは八ヶ岳のふもと、山梨県北杜市。70歳を迎えた今も、1年の半分以上は仕事で空ける。「まだまだ、やることも知りたいこともたっぷりある」

最近は映像の仕事が増え、一眼レフより高解像度のビデオカメラを使うことが多い。だが、機械の自動測定に任せず、自らの判断で作品の隅々にまで責任を持ちたい。露出計は今も手動を愛用している。

2018/10/28 朝日新聞（聞き手 伊藤隆太郎）